

# 親の養育態度と子どもの人格形成



## 三 浦 武

自分の子がよい子になってほしいと願う気持はどの親もがもっているであろう。そして大概の親はできるだけ子どものためになるようにと思って、子どもを躱けているつもりである。ところが客観的に世の親の躱けの様子を見ると、実にさまざまである。躱けの仕方にはその人の性格や人生観が実によく出ている。そして第三者としてこれを見ると、よその親のやり方には批判すべき点がいろいろ見当る。甘過ぎる親、厳し過ぎる親、世話し過ぎる親、放任し過ぎる親などさまざまである。ところがこういう親たちも御当人は自分のやり方がよいと思ってやっていることが多い。

親が子どもに対する時の態度の分類は従来研究者によってまちまちであったが、中西昇氏はこれに統一を与える為に因子分析的研究をおこない、次の四因子を見出した。

- 一、拘束の寛大対嚴格の因子
- 二、偏愛対平等的取り扱いの因子
- 三、民主的対專制的取り扱いの因子

## 四、幼児らしさ対おとならしさの奨励の因子

従来よく使われてきた親が子に対する態度の分類は、民主型、專制型、溺愛型、過保護型、期待型、拒否型、矛盾型、不一致型などである。

專制的で嚴格な態度を親がとると子どもは礼儀正しくなり、責任感ができ、従順になるが、反面、攻撃的、支配的傾向が現われる。稲田準子氏の研究によると養育態度の嚴格な母親の子ども(幼稚園児)は攻撃的傾向が強く、言いわけをしたり、言い抜けをしたりする傾向が多い。嚴格な母親の子は自由寛容な母親の子に比べて外罰的反応(他人が悪いと考える傾向)が多い。

服従的溺愛型すなわちなんでも子どものいいなりになる型の親の場合、子どもは親に対して反抗的攻撃的であり、他の子をいじめたり喧嘩をすることが多い。また情緒の発達が遅れ、自己中心性が強い。

親の見果てぬ夢を子に託すのが期待型である。野心投影型とも呼ばれる。最近、都会の親の野心は主として学業成績の向上に集中されている。そしてある場合には子どもの素質も意に介さないで、子

どもをおけいごとや勉強へとかり立てる。野心型の親に対する子どもの反応の主なもの受身的抵抗である。

矛盾型は今日はこのように駈け、明日はまた別のやり方をするといったタイプである。こういう親の子は情緒的不安をもち、神経症的傾向が生ずる。そして正確すぎたり、ていねいすぎたり、何でもないことを気にかけたりするような強迫行動を起こすものもある。

父と母の養育態度が一致しない不一致型は、アイヒホルンやレヴィーが指摘したごとく、子どもの反抗を生む場合もあり、また陰日なたのある性格を形成することもあるが、父と母は役割が違うのだから、それぞれが違った働き方を子どもに及ぼして、よい子を作る場合もあることは我々のグループの研究でもみられた。

拒否されている子はよく泣いたり、喧嘩をしたり、また奇声を発したりする。これは親の注目を求めようとする行動である。夜尿、盗み、怠業などもこうした機制からされる場合がある。

民主型の場合、子どもは協力的で忍耐強く、自信をもち、安定感があり、人気のある性格になると一般に考えられている。

中西昇氏は大阪のある幼稚園児についての研究で、次のことを見出した。すなわち子どもへの関心が著しい親をもった幼児は、関心の乏しい親をもった幼児に比べて、いつも嬉しそうな幸福な気持をもち、社交的である。著しく寛容でない親をもつ幼児に比べて、より多く周囲のことに敏感に興味をもっている。親子間の調和が著しく良好な幼児およびよく適応し、社会性のある親をもつ幼児は、それぞれ

その反対の親をもつ幼児に比べて能動的で、人目につく行動をする。

我々の研究グループは一昨年以來親子の接触の仕方について調査してきた。その親子の接触の仕方の重要な一つとして親の養育態度も入ってくる。昭和三十二年度の調査では親の養育態度を實質的独立助長的か、その反対の形式的禁止的かという軸で整理してみた。

- ①「しましゅうね」ということの方が「してはいけません」ということより多い。

- ② 食事の時は、きちんと坐って食べることも、食事の前に自発的に手を洗うようにすることの方が大事だと思ふ。

- ③ 家の中で遊ぶときは、おとなの邪魔にならないように遊ぶことよりも、後片づけを自分ですることの方が大事だと思ふ。

- ④ 家の手伝いは、親の言いつけには従順に従う習慣を作るためにさせるよりは、仕事を責任をもっておこなうことの楽しさを教えるためにさせる。

- ⑤ 叱ることよりもほめることの方が多し。

以上の五項目に対し「はい」と答えた数が多いほど、實質的独立助長的であり、その反対なら、形式的禁止的であると見なした。

調査対象は東京都内の二つの私立幼稚園児四〇名と、都内の公立小学校二年生男女各二五名ずつである。子どもの人格は「幼児性行評定尺度」で測った。調査結果から言えることは次のことであつた。

- 一、幼稚園児では父の独立助長的態度が強いほど、性はよい。
- 二、小学二年生では母の独立助長的態度が強い方が性がよい。

三、幼稚園児では父の独立助長的態度と、母の独立助長的態度との強さの差がないほど、性行はよい。

四、小学二年生では、父の独立助長的態度が極端に強いと、極端に弱い場合に、性行がよい。

五、小学二年生では父よりも母の方が独立助長的態度が強い場合に、性行がよい。

近頃の常識からすると、独立助長的養育態度が一般に良いとされるが、父と母とのそれぞれの養育態度の組み合わせ方が重要であり、また子どもの年齢によって望ましい躰け方も違ってくることが示されている。

我々は親の養育態度について、独立助長的か禁止的かという軸の他に、感情的か理知的かという軸も考えた。

① 子どもを叱る時は心から怒って叱り、ほめる時は心から喜んでほめるのではなく、叱る時もほめる時も、いつもその効果を考えてながら叱ったりほめたりする。

② 子どもの教育で一番大事なのは、いつも深い愛情をもって、子どもに接することよりも、いつも親が理屈に合った、そして子どもの納得が得られるような態度で子どもに接することである。

③ 経済の許す限り、子どものほしがるものを買うだけ買ってやりたいと思うよりは、ただ子どものほしがるものを買ってやるのではなく、たとえ子どもがほしがらなくても、子どものためになるものは買ってやりたいと思う。

④ 笑いやユーモアがあり、子どもらしい空想のある子どもに育てるのよりも、合理的、現実的で、きちょうめんな子どもに育てるのがよいと思う。

⑤ 子どもがとくに熱心に遊んだり、勉強したりしている時は、事情によっては日課を多少変えてもよいと思うよりも、どんな事情があっても日課はきちんと守らせる方がもっとよいと思う。

以上の五項目について「はい」と答える数が多いほど理性的であり、その反対なら感情的であると見なした。前述の「幼児性行評定尺度」で測ったものとき合わせた結果では、この感情、理知の軸については、顕著な傾向は見られなかった。しかし幼稚園児については滝沢清子氏により、ロールシャッハ・テストも実施され、幼児の精神的健康度を測定した。その結果をみると、次のことが統計的に有意であった。

① 父の理知点は低い方が幼児の人格がよい。

② 父と母の理知点のずれは少ない方が幼児の人格がよい。

③ 父の独立助長点は高い方が幼児の人格がよい。

④ 父と母の独立助長点のずれもまた少ない方が幼児の人格がよい。

このデータにおいては父の理知点の低い場合は、親子の親密さが低い傾向があり、独立助長点が高い場合は親密度が高い傾向があった。父との親密度の高い方が子どもの人格がよいので、父の理知点が低く、独立点が高い場合に、子どもの人格がよいという結果にな

だったのであろう。

我々の昭和三十三年度の調査では、親子関係について「親和」「保護」「子どもの意志の尊重」「親からの圧力」の四項目について測定した。「親和」と「保護」を併せて広義の保護とし、「意志尊重」と「圧力」とを併せて広義の「圧力」として整理した。この指数に自ら親の養育態度もかがうことができる。我々は幼稚園児と小学校三年生について調査したが、ここでは幼稚園児の結果だけについて記すことにする。結果は左の四つの表のごとくである。

① 父の保護意識(子どもと親和し、保護していると父が自分で自己評価している程度)は中位の時が、子どもの性行が一番よい。父の保護意識が強い時、子どもの性行は一番悪い。父の保護意識が弱い時、性行は一般に望ましい傾向にある。(第1表参照)

第1表 父の保護意識と子どもの性行の関係

性行点	上	中	下	計
大	4	4	5	13
中	10	7	7	24
小	5	5	3	13
計	19	16	15	50

第3表 父の圧力点と子どもの性行総点との関係

性行点	上	中	下	計
大	7	4	2	13
中	6	5	9	20
小	6	7	4	17
計	19	16	15	50

第2表 母の保護意識と子どもの性行の関係

性行点	上	中	下	計
大	4	3	4	11
中	11	8	8	27
小	4	5	3	12
計	19	16	15	50

第4表 母の圧力点と子どもの性行総点との関係

性行点	上	中	下	計
大	5	5	4	14
中	11	8	6	25
小	3	3	5	11
計	19	16	15	50

② 母の保護意識も中位の時が子どもの性行が一番よい。母の保護意識が弱い時、子どもの性行は一番悪い。母の保護意識が強い場合は性行の望ましい傾向

の望ましい傾向

と望ましくない傾向が同程度にある。(第2表参照)

③ 父の子どもに対する圧力意識は弱い時が子どもの性行が一番よい。圧力意識が強い時、性行は望ましくない傾向よりも望ましい傾向の方が大きい。(第3表参照)

④ 母の圧力意識は中位の時が子どもの性行が一番よい。母の圧力意識が強い時、子どもの性行は一番悪い。圧力意識が弱い場合、性行の望ましい傾向は小さい。(第4表参照)

同じ被験幼児の一部に滝沢清子氏がロールシャッハ・テストを実施し、精神的健康度を示す指数を算出した。それと親子の接触との関係を見ると、親子の接触の程度の低い方が、子どもの人格がよかった。これは最初の子想には反した結果であったが、よい子の親は子どもとの接触に関する報告(自己評価)が控え目であることも考えられるし、よい子であれば自立性が強く、保護、親和などの接触もさして必要としないという面も考えられる。果たして接触が少ないことがよい子を形成する条件であろうか。この結果の多義性は今後の分析によつてはつきりさせなくてはいけないと思っているが、実験ではなくて生きた現実の状況の調査だけではすつきりした結論を出すことはなかなかむずかしい。

我々はさらに幼児性行評定尺度の項目を幾つかに分類し、わがまま型、注意散漫型、意志薄弱型、ひねくれ型に分け、親の養育態度との関係をみたが、この点は他日に譲る。(ここに引用した我々のグループの研究は森重敏、三輪正阿氏との共同研究の一部である。)